

ナンが名ぢゃ

What's in a name?

寺村 裕史
てらむら ひろふみ

民博 人類文明誌研究部



海外のモノや事例について、日本語でエッセイ・論文などを執筆するにあたって、いちばん困る（あるいは、気を遣う）ことが、現地語の読み「カタカナ表記」である。名は体をあらわす、というのが、名前（の表記）が一字違っただけで、受ける印象が大きく変わってしまう場合もあるだろう。ここでは、そういった事例を紹介しながら、名前のカタカナ表記について考えてみたい。

まず、読者のみなさんは、食べ物「ナン」と聞くと何を思い浮かべるだろうか。日本でまずいちばんに想像されるものは、インド料理とセットになった「ナン」なのではないかと思う。日本のインド料理店では、一六等分されたピザを巨大にしたような平たいパン（ナン）が、ほぼ例外なくカレーと一緒に提供される。

しかし、世界の他の地域を探してみると、ナンとよばれていても、円形や楕円形であったり、作り方・焼き方が異なるなど、さまざまなナンが存在する。筆者が調査でよく訪れるウズベキスタンでは、東部の都市サマルカンドで売られているナンが国内各地でも有名なのだが、

我々がイメージするインド料理店のナンとは形状や食感も大きく異なる。そのナンは、比較的しつかりした歯ごたえで、形



サマルカンドの「ノン」（インド料理店で出されるナンとは、味も形もまったく異なる。表現が難しいが、味はロールパンに近く、食感はそれをぎゅっと圧縮して硬くしたような歯ごたえである）

は丸く直径二十センチメートルほど、厚みは三〜五センチメートルくらいあり、中央が深く窪んでいて、窪みに装飾が施されているものもある。

このサマルカンドのナンであるが、旅行ガイドブックなどでは「ナン」と書かれているものが多い。けれども、みんぱくの中央・北アジア展示場の解説パネルには、現地語の発音に忠実に「ノン」と表記されている。この場合、インド料理の「ナン」と、ウズベキスタンの「ノン」は、味も形も異なる「別のモノ」ととらえれば、名前が違っていてもそれほど違和感はないかもしれない。

一方、逆のパターンで、「同じモノ」を指すにもかかわらず名前が異なる例を挙げてみたい。筆者が高校生のときに世界史の授業で習った、インダス文明でもっとも著名な都市遺跡の名前は「モヘンジョ・ダロ」であった。しかし、現在の教科書では「モエンジョ・ダロ」と記載されている。教科書の改訂で、より現地語の読みに忠実になるよう表記が変更になっただけ、と単純に割り切ってしまう方がいいのだが、筆者には別の遺跡のように思えて仕方がない。そして、いざ文章で言及する場合にどちらの表記を使えばよいか悩んでしまう。「今の教科書では、こう表記されているのだから」という理屈では、なんとなく納得がいけないのは世代差の癖（ひが）なのだろうか。

現地語読みを日本語（カタカナ）表記しようとする、このような問題がつきまとう。慣れ親しんだ名前ほど、カタカナが一字違っただけで生じる違和感は大い気がある。